

私の
子ども
時代
(4)



おじいちゃん
の
ちいさかつたころ

松本 十寸穂

松本のおじいちゃんに、子ども時代のお話をうかがいました。おじいちゃんは、大正五年、大阪府南河内郡の中村というところで生まれ育ちました。このお話は、大正末期から昭和のはじめのお話です。
(編集部)

「きつね」

おじいちゃんの小さい時分の田舎の話をしてあげよう。

私の生まれた村はすごい田舎で、大阪と奈良の境、南に金剛山、東に葛城山のある山の



中の村なんだ。冬は日があたらなくてとても寒くて、夜になるとまっ暗で星一つない。だから子ども達はみんな家うちにいる。家うちにいることしかできないんだ。それでも私は夜になったら川かわへ行った。山にうさぎとりの仕掛けをかけた。そしてうさぎやいたちをとって楽しんだよ。実益はあったよ、少しは。山鳥、たぬき、いたちがとれた。とって毛皮を売るんだ。買いにくる人がいてね。小使い稼かせぎというよりも、親がよろこんだんだから、家計の足しになったんだらうね。そうとうなものだったよ。

ある時、兄さんと夜の猟に行ったんだ。もちろん密猟だ。本当は夜はいけないんだ。日の出から日没までしか猟をしてはいけないいきまりがあつて、狩猟免許を持っている人でも、とりすぎを禁じるために、夜はやらなかったんだ。だから子どもは、夜行くんだ。夜魚とりに行くのは「よぼり」というんだ。

まっ暗な道なんて今は知らないでしょ。細い細い道が続いていて、星の光でその細い道だけが白く見える。ため池がたくさんあつて、その中にお地藏さんをまつてある。"地藏池"というのがあるんだ。お地藏さんは死んだ子どもこどもの供養だから、普通の子どもは近寄り難いくらいこわい所なんだよ。

六つ年上の兄さんと二人で、わなにわなにする竹の材料やとれた魚やえさをかついで帰ってきたんだ。そしたら何だか知らないけど急に荷物が重くなった。「しっかりしろ」と兄さんに言われながら、歩いていくと、隣村に入ったとたん、どういうわけか軽くなったんだ。



その村を通過すると明かりがあかあかとついて、コンコンと大きな音をさせて村の人がなにかやってくるんだよ。十二時半ごろだよ。「何だろう」と思っていたら、兄さんが「あれは醤油屋の仕込みの杜氏とうじが唄をうたっているんだろ」というので、そうかと思いいながら家に着いたんだ。

親父おやじさんが「ずい分おそかったな」とむかえてくれた。「醤油屋は今ごろまでやっているんだね」と言うと、「今はもう醤油の仕込みをする時期じゃない。それはきつねにだまされたんだろう」と、親父さんが言うんだ。それをきいて体中からだじゅうがゾッととして背中が寒くなって、こたつに入っただけに寝てしまったよ。本当にきつねにはかさされたのかよくわからないけど、「きつねだ」ときいた一言で、ゾッととして納得したんだね。

次の日行ってみても、もう何もやってないんだ。こういう話が伝わるんだろうね。大人は面白半分おもしろ半分に言うんだろうけれど、子どもは理屈りくつじゃなくきつねにだまされたと信じていたね。

「将棋」

若い時分、奉公したてのころの話をしよう。見習いの丁稚奉公ていぢほうこうだよ。

お客さんに西川さんという按摩あんまさんのうちがあったんだ。使いでそこに行くと、全く目の見えない若主人が、「ぼんさんぼんさん（小僧さんのこと）、将棋教しょうぎえてあげようか」って言うん



だ。目の見えない人がどうやって将棋をさすんだろうと思っていたんだ。

初めは、「歩三つ」でやるんだ。先生の方は歩三つと王将しかもっていない。私の方は、全駒そろっている。それでもころっと負けてしまう。毎日、毎日、そこへ遊びに行っ
て習ったんだ。

ある時「どうして将棋の駒が、どこに何があるかわかるんですか？」って聞いたんだ。
そしたら西川さんが言うには、「わしは全部知ってる。将棋盤の九・九・八十一を全部心
の中に描いている。だから、わしが目が悪いものだから相手が駒を勝手に動かしたってだ
めなんだ。駒をおいてもらう時に、何の駒を前後、左右にいくつ動かしたと言ってもら
と、それは全部心の中の将棋盤に記憶する。とった駒もわかる。わしの将棋の駒には全部
指でさわってわかるように印がしてある。穴をあけたり、小さなくぎをうったりして」と
言うんだ。その時、目の悪い人は、とても頭が落ちついているんだな、と思ったね。

実際、勝負の方は、一回も勝てなかった。目の悪い人と将棋をさすのは、誰もごまかす
ことはできないんだ。地震があっても、火事があっても、絶対忘れないから。先生が歩三
つからだんだん歩を全部並べて、槍をはずしたり角をはずしたりして、上へ上がってい
く。対等に全駒並べてやると、三回目で負けてしまう。ハンディがついていればまあまあ
だな。

歩三つというのは、大阪では「歩三コ」といって、素人では絶対勝てないんだって。相



手のいい駒をとることができない。とる駒は歩三つしかない。むこうは歩でも押しかけてきて金になれる。金が三つあれば勝てる。歩は一つしか進めないの、とつても敵陣に入って動かなければ、金になれない。初めは歩の動きしかできない。角の前に歩をおかれると動けないでとられた場合、相手の歩は金になり、しかも角もつことになる。将棋は敵の駒をとつてうまく使うということを教えられたね。

「うさぎ」

小学校にあがる前にうさぎがはやったんだ。大人の間で、ベットとしてうさぎとチャボがはやったね。

私は小さいころから、生まれたばかりのうさぎの雌雄の鑑別ができたんだ。うさぎは難しいんだよ。生後十日位で目があいて、そしたらわかるんだ。

当時、すごく流行したから、うさぎを買い集めに来る人がいたんだ。田舎の山の中の家で飼っているうさぎを、百奴いくらで買い集めてきて、一羽いくらで市場のオークションに出すわけだ。村では植木のオークションが毎日あるので、ついでにうさぎも出す。チャボ、おもと、らんなどめずらしいものも田舎の山奥の村へ行って買い集めてくる。ところがうさぎは、買いに行く人が、オス・メスの判別がわからない。どちらが高いという訳ではないのだけれど、オスが何羽、メスが何羽かとわかっていけば、売る時に有利なんだろ



うね。私は、その人の自転車の荷台に乗せられて、大和の国まで山を越えて買いに行く。おいしいものを食べさせてくれたよ。「ほん、見て」って言われて、オスはこっちの箱、メスはこっちの箱ってわけて入れる。むこうの人にはだまっでいて、こちらだけはわかっている。「これはオスばかりで、ダメだな!!」なんて、半分だまして、安く買ったつもりだよ。私は、まだ五歳位だから、ただおいしいものやおみやげを買ってもらえるのがうれしくてね。

うさぎは、次の日のオークションに出されて、誰かがせり落とす。めずらしい今でいうバンダうさぎなんかがあると、高く売れた。めずらしいうさぎ、例えば目の黒い白うさぎやアンゴラなどはあの時代十円位したね。十円で米一俵半買える時代だったから、すごくいい値だったね。私はおだちに五十銭位もらえたかな。元手は二、三円出していたけれど、ぼろもうけたね。とにかくペットは高く売れた。村ではペット用にセキセイインコ、養殖のアメリカンブルフロッグ（カエル）、おもと、チャボ、うさぎ、棕櫚竹（しょうりちく）などつくっている家が多かったね。

私の村には大阪市の公園課で人夫のようなことを仕事にしていた人が多くて、公園課は動物園や園芸などを管轄していたので、動植物の育て方をよく知っている人が多かったんだ。山と山にはさまれて、日照時間の少ない寒い村なので、お米もたくさんとれないし、麦も五月ごろにならなければできない。山のかげだからね。そんな村だから、ペット



が現金収入になったんだ。趣味と実益をかねていたんだね。
うさぎの鑑別は、小さいから覚えられたんだろうね。大きくなったらできない。にわとりの鑑別でもそうだ。小さい時に覚えたら何でもないことなんだよ。なんだろうね、感なんだろうか、見たらわかる。小さい子の方が純粋なんだろうね。

(録音編集・編集部)

